

本学看護学生の看護職への態度に関する調査(第Ⅱ報)

川崎医療短期大学 第二看護科

林 喜美子 松本 明美

(昭和63年8月23日受理)

A Study on the Student Nurses' Attitude toward their Profession in Kawasaki College of Allied Health Professions

Kimiko HAYASHI, Akemi MATSUMOTO

Department of Nursing, Kawasaki College of Allied Health Professions
Kurashiki, Okayama 701-01 Japan

(Received on Aug. 23, 1988)

Key words : 看護学生, 看護職, 態度, 適合性

概 要

昨年に続いて、本学看護学生の看護職への態度に関して、課程別の特徴、1年間の意識の変化、入学時目的意識が明確でないとした学生(B群)の1年間の変化をみた。課程別の大きな特徴はみえなかったが、1N2年生に各項目にわたってマイナス面への変化があり、3年生は最終学年生としての目標達成への努力自覚の一端がみえる変化があった。2N2年生は1N3年生との共通点も少なく、特徴は見えなかった。B群は各学年全体に比べて変化は少なかった。教育課程の中での学生の動きと大まかな特徴を把握することはできた。

はじめに

昨年(1987年)岡本・松本らの「進路選択状況調査」による調査票を使って、本学看護学生の看護職への態度に関する実態を調べた。

今回、同じ調査票を使って、1)3年課程と2年課程学生との比較、2)1987年と88年の学年別変化、3)入学時目的意識が明確でないとした学生(B群)の変化をみた。

昨年に続く調査の中間結果として報告する。

1. 研究方法

対 象

現在第1看護科(1N)と第2看護科(2N)に在学している252人。以下1N, 2Nと記す。1Nは93.2%が高校普通科の卒業で、2Nは89.6%が高校衛生看護科の卒業である。出身地域は中国地方1Nが78%, 2Nが65.2%で最も多く、次いで九州近畿地方である。年齢は1Nが18から20歳が83.4%, 2Nは87.0%である。

期 間

第1回 1987年7月1日から7月3日

第2回 1988年7月12日から7月30日

内 容

(1)看護学校入学時の状況

- ①入学決意の時期
- ②受験時の進路予定
- ③周囲の反応

(2)看護職に対する態度

- ①進路選択に対する評価
- ②看護職の適合性
- ③自分の子供に対する態度

表1 調査対象

課程	入学年			計
	1988 1年	1987 2年	1986 3年	
第1看護科(1N)	51	40 [*]	55	146 ^人
第2看護科(2N)	53	53		106 ^人

アンケート回収率, 100% *のみ 69%

- ④ 聖職観
- ⑤ 看護婦の職業イメージ
- (3) 現在の生活
 - ① 看護学生である誇りと生活の満足感
 - ② 生活上重視している事柄
- (4) 将来の計画……検討不十分にて今回除く
 - ① 卒業後の進路予定と聖職観
 - ② 職場選択の基準

2. 結果

(1) 看護学校入学時の状況

① 入学決意の時期

昨年の調査結果と比べて大きな違いはなかった。

② 受験時の進路予定

受験時に看護学校だけ考えていたか、他の進路も併せて考えていたか、他の進路との関係をみたのが表2である。

看護学校(本学以外の看護系の大学・短大

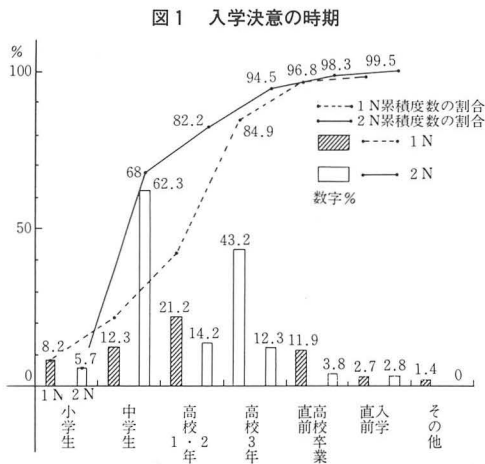


表2 受験時の進路予定

進路先	1 N	2 N
	146人(100)	106人(100)
看護学校だけ (本学以外の大学・ 短大も含む)	68 (46.6)	80 (75.5)
他の進路	78 (53.4)	26 (24.5)
大学	49 (62.8)	10 (38.5)
短大	22 (28.2)	4 (15.4)
各種学校	4 (5.1)	6 (23.1)
就職	2 (2.6)	5 (19.2)
無回答	1 (1.3)	1 (2.6)

} 重複回答あり

()内は%

表3 身近な人達の反応

賛成・反対の反応		父	母	周囲の大人	担任の先生	友人
1 N	賛成	53.4	60.1	52.1	55.5	59.6
	反対	15.8	13.0	12.3	8.9	5.5
2 N	賛成	62.3	75.5	64.2	76.4	77.4
	反対	8.5	9.4	8.5	6.6	1.9

数字は%

も含む) だけ考えていた人は1Nが46.6%, 2Nが75.5%で他の進路も併せて考えていた人は1Nが53.4%, 2Nが24.5%である。2Nは高校衛生看護科を看護学校として回答している人があり設問上の不備が考えられるので1Nのみについて前者をA群, 後者をB群とする。

他の進路は, 1Nは大学・短大が約90%で学部学科は教育学部, 薬学部, 福祉学科, 英文学部, 国文学部, 栄養科, 幼児教育科等様々である。2Nは歯科衛生士, 作業療法士等医療関係の学校が多い。

他の進路を考えていたにもかかわらず, 看護学校に入学した主な理由は, 1Nは「受験に失敗した, 学力が足りない」「看護婦の方がよいと思った」2Nは「看護婦になりたかった, 将来性を考えて」「准看護婦制度廃止と聞いて」等である。

③ 周囲の反応

看護学校受験に対する「身近な人達」の反応を賛成か反対でみたのが表3である。

賛成率が高いのは1N, 2N共に「母」「友人」「担任の先生」で, 反対率が高いのも1N, 2N共に「父」「母」「周囲の大人」である。「父」や「母」に反対された者についてその主な理由をみると

1) 看護職の特殊性, 対社会的なもの

「重労働である」「夜勤がある」「死に出会う」「社会的地位が低い」

2) 本人の適性, 身体的なもの

「性格が向いてない」「体力がない」

3) 他の職種を望むもの

「普通の大学・短大に行ってほしい」「手に職をつけなくてよい」等となっている。

(2) 看護職に対する態度

① 進路選択に対する評価

A) 1988年在学生

進路選択という点からみて、看護短大に入学したことはどうであったと思うか、について、1 Nと2 Nの回答結果が表4である。

「間違っていなかったと思う」と「まあ大した間違いはなかった」を肯定的評価、「色々と問題はあったようだ」と「間違っていたと思う」を否定的評価としてみた。1 Nは「肯定的評価(67.8%)」「否定的評価(21.2%)」で、2 Nは「肯定的評価(60.2%)」「否定的評価(15.6%)」である。「分からない」と判断に迷っている者が1 Nは11.6%、2 Nが13.2%である。

B) 1987年と88年の学年別

1 N 3年(1986年入学)と2年生(1987年入学) 2 N 2年生(1987年入学)について、1年間で進路選択に対する評価に変化があったか否かをみた。1 N 3年生は変化が認められないが、1 N 2年生は $ZO = -3.0344, P < 0.010$, 2 N 2年生は $ZO = -2.2565, P < 0.05$ で有意の差がある。

さらに、昨年の調査で受験時に他の進路も併せて考えていた人達(1 NのみのB群)について、1年間で進路選択評価に変化があったかをみた。

B群は昨年の調査で「間違っていた」と答えた人が有意に高かったが、今回2年生に $ZO = -1.9070, P < 0.05$ で有意の差があった。

② 看護職の適合性

A) 1988年在学生

1 N, 2 N共に適合性がある(「合っている」と「まあ合っている」と答えているのは、「将来設計」「仕事観」「興味・関心」「体力・身体的条件」である。適合性がないのは「学力」「性格」で、

あるなしの項目は昨年の結果と同じである。

B) 1987年と88年の学年別

実数とその全体に占める割合とその結果を検定したものが表6, 7, 8である。1 N 3年はB群共に「体力」に変化があった。1 N 2年は「興味・関心」「学力」「体力」「将来設計」で変化があったが、B群は「興味・関心」だけであった。2 N 2年生は、「興味・関心」「仕事観」「将来設計」に適合性の変化があったが各学年に共通した特色はなかった。

③ 自分の子供に対する態度

自分の子供に看護職を勧めるかどうかについては、1 N, 2 N共に「どちらともいえない」次が「一応勧める」で昨年の結果と同じである。

④ 聖職観

「『看護婦は尊い職業だ』という意見は自分の考えとどの程度一致するか」をみた。昨年に比べて、1年間で変化があったのは1 N 3年生 $ZO = -1.7080, P < 0.05$, 2 N 2年生 $ZO = -1.8014, P < 0.05$ で「聖職である」と思っていた人が「どちらともいえない」に変わっている。B群では変化はみられなかった。

⑤ 看護婦の職業イメージ

A) 1988年在学生

看護婦の職業イメージを10の側面からとらえ「++(良いイメージ)」から「--(悪いイメージ)」の5段階で回答を求めそれぞれに1点から5点を与えて平均値を求めた。1 N, 2 N共良いイメージの1位は「やりがい」であり2位は「仕事

表4 ① 進路選択に対する評価

	1 N	2 N
間違っていなかったと思う	47 (32.9)	34 (32.1)
まあ大した間違いはなかった	51 (34.9)	41 (28.1)
いろいろと問題があったようだ	25 (17.1)	15 (14.2)
間違っていたと思う	6 (4.1)	2 (1.4)
わからない	17 (11.6)	14 (13.2)

()内は%

表5 ② 進路選択に対する評価

	1 N 3年		1 N 2年		2 N 2年	
	1987年	1988年	1987年	1988年	1987年	1988年
間違っていなかったと思う	17 (29.8)	12 (21.8)	27 (46.6)	9 (22.5)	23 (45.1)	17 (32.0)
まあ大した間違いはなかった	11 (19.3)	22 (40.0)	20 (34.5)	14 (35.0)	24 (47.1)	20 (38.0)
いろいろと問題があったようだ	10 (17.5)	12 (21.8)	3 (5.1)	7 (17.5)	0 (0)	9 (16.9)
間違っていたと思う	2 (3.6)	3 (5.4)	0 (0)	2 (5.0)	2 (3.9)	1 (1.8)
わからない	17 (29.8)	6 (11.0)	8 (13.8)	8 (20.0)	2 (3.9)	6 (11.3)

()内は%

表6 看護職の適合性

	1 N 3 年 (1986年入学生)				1 N 2 年 (1987年入学生)				2 N 2 年 (1987年入学生)			
	合っている	まあ合っている	あまり合っていない	合っていない	合っている	まあ合っている	あまり合っていない	合っていない	合っている	まあ合っている	あまり合っていない	合っていない
興味・関心	21.8 (24.6)	60.0 (57.9)	16.4 (17.5)	1.8 (0)	10.0 (36.2)	70.0 (55.2)	15.0 (6.9)	5.0 (1.7)	3.8 (19.6)	75.1 (66.7)	17.3 (13.7)	3.8 (0)
学 力	5.4 (5.3)	60.0 (59.6)	31.0 (31.6)	3.6 (3.5)	2.5 (10.4)	47.5 (72.4)	40.0 (17.2)	10.0 (0)	0 (2.0)	52.9 (62.7)	39.6 (33.3)	7.5 (2.0)
体力や身体	20.0 (33.3)	49.2 (50.9)	23.6 (14.0)	7.2 (1.8)	17.5 (37.9)	65.0 (50.0)	12.5 (12.1)	5.0 (0)	26.4 (25.5)	53.8 (52.9)	18.0 (21.6)	1.8 (0)
仕事観・職業観	25.5 (38.6)	58.2 (43.9)	14.5 (17.5)	1.8 (0)	35.0 (48.3)	50.0 (44.8)	10.0 (5.2)	5.0 (1.7)	18.0 (17.6)	55.6 (72.5)	26.4 (9.9)	0 (0)
性 格	18.2 (14.0)	49.2 (57.9)	29.0 (26.3)	3.6 (1.8)	7.5 (17.2)	51.4 (51.8)	38.5 (31.0)	2.6 (0)	13.2 (17.6)	52.9 (54.9)	22.6 (23.5)	11.3 (4.0)
将来設計	32.7 (31.6)	47.4 (52.6)	12.7 (15.8)	7.2 (0)	17.5 (36.2)	62.5 (56.9)	20.0 (6.9)	0 (0)	24.5 (37.2)	58.5 (58.8)	13.2 (2.0)	3.8 (2.0)

表7 看護職の適合性 B群

	1 N 3 年 (1986年入学生)				1 N 2 年 (1987年入学生)			
	合っている	まあ合っている	あまり合っていない	合っていない	合っている	まあ合っている	あまり合っていない	合っていない
興味・関心	17.1 (19.4)	62.9 (58.0)	20.0 (22.6)	0 (0)	0 (28.0)	66.6 (56.0)	26.7 (16.0)	6.7 (0)
学 力	2.6 (6.5)	60.5 (51.5)	34.3 (35.5)	2.6 (6.5)	33.3 (4.0)	46.6 (73.0)	6.7 (24.0)	13.4 (0)
体力や身体	14.3 (29.0)	57.1 (54.9)	22.9 (16.1)	5.7 (0)	6.7 (24.0)	73.2 (54.0)	13.4 (24.0)	6.7 (0)
仕事観・職業観	11.4 (38.7)	74.3 (38.7)	14.3 (22.6)	0 (0)	40.0 (36.0)	40.0 (52.0)	13.4 (8.0)	6.6 (4.0)
性 格	11.4 (12.9)	57.2 (58.1)	31.4 (29.0)	0 (0)	14.3 (12.0)	35.7 (48.0)	50.0 (40.0)	0 (0)
将来設計	28.6 (32.3)	54.3 (48.3)	11.4 (19.4)	5.7 (0)	20.0 (28.0)	60.0 (60.0)	20.0 (12.0)	0 (0)

回答を%であらわしたもので、
上段の数字が1988年、
下段の()内の数字が1987年

表8 看護職の適合性、検定結果 (wilcoxon 検定)

	1 N 3 年		1 N 3 年 B群		1 N 2 年		1 N 2 年 B群		2 N 2 年	
	Z	P	Z	P	Z	P	Z	P	Z	P
興味・関心					Z=-3.0239	P<0.0025	Z=-2.2111	P<0.015	Z=-2.1995	P<0.015
学 力					Z=-3.6640	P<0.0025				
体 力	Z=-2.1695	P<0.05	Z=-1.7165	P<0.05	Z=-2.0624	P<0.05				
仕 事 観									Z=-2.3114	P<0.0125
性 格										
将来設計					Z=-2.4668	P<0.0075			Z=-2.0284	P<0.023

有意差のあったもののみ記入

表9 聖職観

	1 N 3 年		1 N 2 年		2 N 2 年	
	S 62年	S 63年	S 62年	S 63年	S 62年	S 63年
一致している	34人 (59.7)	23人 (41.8)	37人 (63.8)	23人 (57.5)	32人 (62.7)	22人 (41.5)
どちらともいえない	19 (33.3)	28 (51.0)	18 (31.0)	15 (37.5)	14 (27.5)	27 (50.9)
一致していない	4 (7.0)	4 (7.2)	3 (5.2)	2 (5.0)	5 (9.8)	4 (7.5)

()は%

図2 職業イメージの変化

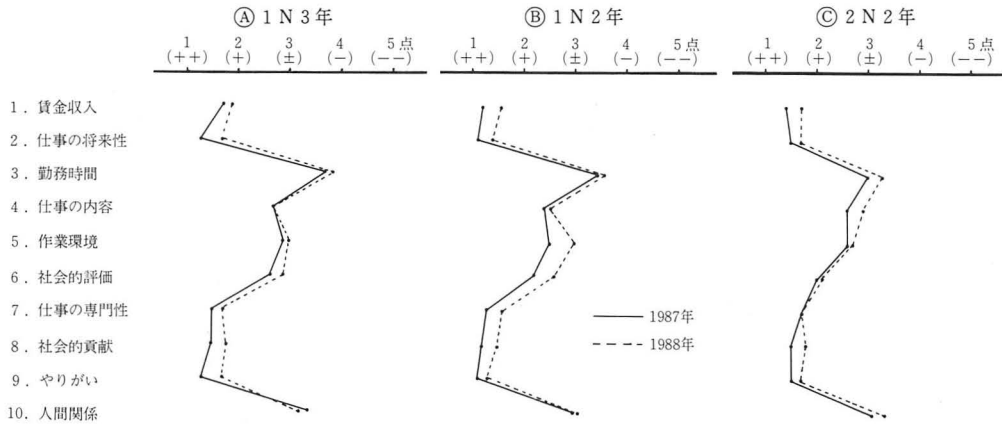


表10 職業イメージ, 検定結果

	1 N 3 年	1 N 3 年 B群	1 N 2 年	1 N 2 年 B群	2 N 2 年
賃金収入			Z=-2.5399 P<0.0075	Z=-1.8126 P<0.04	Z=-2.5338 P<0.0075
仕事の将来性	Z=-2.5050 P<0.0075	Z=-1.8969 P<0.03	Z=-2.7078 P<0.005		
勤務時間					(Z=-1.5150) (P<0.075)
仕事の内容					Z=-1.8388 P<0.04
作業環境			Z=-2.6825 P<0.005		
社会的評価	(Z=-1.4482) (P<0.075)		Z=-2.2468 P<0.0125	Z=-2.5514 P<0.0075	
仕事の専門性	Z=-1.6778 P<0.05		(Z=-1.6088) (P<0.075)		
社会的貢献	Z=-1.6573 P<0.05	(Z=-1.5503) (P<0.075)	Z=-3.7270 P<0.0025	(Z=-1.6277) (P<0.075)	Z=-1.7854 P<0.04
やりがい	Z=-3.4216 P<0.0025	Z=-2.5360 P<0.0075	Z=-2.1644 P<0.0175		Z=-2.1720 P<0.015
人間関係					

()内は有意水準0.06%以上, 0.075%以下

の将来性」3位は1N「仕事の専門性」「社会的貢献」(同点)2N「賃金収入」である。逆に悪いイメージのものは、1N, 2N共に「勤務時間」次いで「人間関係」であった。

B) 1987年と88年の学年別

意識の割合が変化したもので1N2・3年生で共通しているのは「仕事の将来性」「社会的評価」「仕事の専門性」「社会的貢献」「やりがい」の5項目で、2年生はそれに「作業環境」が加わって6項目となっている。2N2年生は5項目に変化があり、3項目は1Nと共通しているが「勤務時間」「仕事の内容」が違っている。

次に学年全体とB群を比べてみると、1N3年B群は「仕事の将来性」と「やりがい」2年生は「賃金収入」と「社会的評価」に変化がある。

(3) 現在の生活

①看護学生である誇りと生活の満足感

看護学生である誇りと現在の生活の満足感についてみた。

誇り, 満足感共に昨年より「誇りを持っている」「満足している」と答えた人の割合は約10%多いが、1年間ではどの学年学科にも変化はない。

②生活上重視している事柄

A) 1988年在学生

日常生活上重視しているもの10項目について、重視度をみた結果「重視している」比率の高いのは「友人」1Nが92.2%, 2Nが87.8%, 「学業や実習」1Nが88.3%, 2Nが87.8%, 「身体や健康」1Nが85.6%, 2Nが89.7%で1N, 2Nと共通している。昨年の結果とも同じである。

B) 1987年と88年の学年別

10項目に占める割合を昨年と比較すると、1N3年生は「身体や健康」「家族」「クラブ活動」「政治」に関することで有意差があった。1N2年生は「学業や実習」「恋愛や結婚」「教養や趣味」に関することに変化があった。2N2年生は「クラブ活動」だけであった。

B群は、割合の変化した項目が全体に比べて少なく、1N3年生の「身体や健康」「政治」に関することと、2年生の「恋愛や結婚」だけであった。

3. 考 察

受験時に看護学校だけ考えていた人達(A群)と他の進路も併せて考えていた人達(B群)の割合はほぼ1Nが5:5、2Nが7.5:2.5である。

1Nは全員が普通科卒で多方面への進路が可能であり、進路先は教育学部、英文学部等と医療との関連のない大学短大が多い。B群の人達が本学に入学した主な理由から、他の進路に第一希望がありながら「学力不足」等で入学できなかった人が多いと考えられる。また、「看護婦の方がよいと思った」という理由を職業イメージからみると「賃金・収入」「将来性」「専門性」「やりがい」「社会的貢献」の項目が高く、これらから看護職に求めているものを知ることできる。

2Nは衛生看護科卒の人が約9割であることから、他の進路も医療関連職種でありその数も少ないと考えられる。また看護婦免許が取れる課程を選んだ人の割合が多いのは、現代の医療看護の場では、准看護婦免許だけでは仕事ができない、と将来

性を考えて進学した人また、昭和60年に始まった看護制度検討会の影響を受けていると考えられる。

次に、1N3年生と2年生について、(a)進路選択の評価、(b)適合性、(c)職業イメージ、(d)生活上の重視度との関連で1年間の変化をみると、3年生は(a)については変化なく、2年生は「間違っていた」「分からない」の否定的評価が多くなっている。(b)について適合性なしに変化しているのは3年生は「体力」だけで2年生は「興味・関心」「学力」「体力」「将来設計」の4項目に変化がある。(c)は、10項目のうち3年生は4つ、2年生は6つの項目が悪いイメージに変化しており共通しているのは「仕事の将来性」「社会的貢献」「やりがい」の3項目である。

3年生が「体力」に適合性がない、としていることと(d)で「身体・健康」を重視していることは、週4日の病院実習が続いている教育の背景が考えられる。現状を把握し、目的を達成させようとしている積極的姿勢ともとれる。「政治」の重視度が高くなっているのも、自分のことから周囲社会へと関心が広がってきたと受け止められる。卒業年次の学生としての姿勢、役割期待を果たしていることの一端が見える。

2年生は「興味・関心」「将来設計」といった抽象的心理的要素が大きい面の適合性が低く、日常生活で「学業」の重視度が低く「恋愛」「教養趣味」が高くなっていることとの関連性をみることのできる。1年次半ば(7月)からの1年間(2年次7月まで)は、講義も専門教育科目が増え、看護実習では総合I(病院での見学実習2日)II(患者を観察する5日)を経験したところで、患者を受

表11 生活上の重視度

	1 N 3 年	1 N 3 年 B群	1 N 2 年	1 N 2 年 B群	2 N 2 年
身体や健康に関すること	Z=2.5969 P<0.005	Z=1.9231 P<0.03			
学業や実習に関すること	(Z=1.3630) (P<0.1)	(Z=1.4018) (P<0.1)	Z=-2.2197 P<0.015	(Z=-1.4696) (P<0.075)	
進路に関すること					
家族に関すること	Z=-2.1264 P<0.0175				
友人に関すること					
恋愛や結婚に関すること		(Z=-1.3522) (P<0.1)	Z=3.4437 P<0.0025	Z=1.7251 P<0.1	
レジャーに関すること			(Z=1.4193) (P<0.1)		
クラブ活動に関すること	Z=-1.9021 P<0.03		(Z=-1.3337) (P<0.1)		Z=-3.8658 P<0.0025
政治に関すること	Z=1.6722 P<0.05	Z=1.8914 P<0.03			
教養や趣味に関すること			Z=3.4267 P<0.0025		

()内は有意水準0.1%以下、0.06%以上

け持って看護過程を体験する前段階である。

学生と直接かかわって、指導してきた体験からも3年間の2年目は中だるみの現象が起りやすいことを実感的に把んでいたが、今回の調査結果からも、大きな変化がある時期だと捉えることができる。今回は1年間しかみてないので、この学年特有のものなのか2年次に共通した現象なのかは継続してみる必要があるが、教育上1つの大事な時期だと考えられる。

2N2年生は、1N3年生と共に最終学年であるが、進路選択の評価もマイナス面への評価が多くなり「興味・関心」「将来設計」という1N2年生と共通した項目と「仕事観」の3項目で適合性ありの割合が減少している。生活の上で「クラブ」の重視度が減ったのは、1N3年生と共通しているがその他特徴的なものは見えない。2Nは、衛生看護科の教育と学科目、病院実習という面では共通点が多い。短大看護科に進学した人たちが、人間形成の面、看護の本質に触れた感動を味う等教育内容方法の工夫がいろいろと思われる。高校から継続したような教育環境の2年間では、看護職への態度に大きな変化は見られないのではないだろうか。

B群については今回は結果だけに止める。

ま と め

- 1) 看護職への態度を、(a)進路に対する評価、(b)適合性、(c)職業イメージ、(d)生活上の重視度との関連でみた。
 - (1) 1Nと2Nとでは各項目に大きな差はなく、課程別の特徴は見えなかった。
 - (2) 1N(3年課程)2、3年生と2N(2年課程)2年生について、(a)~(d)についての1年間の変化では
 - 1N2年生は各項目にわたってマイナス面への変化が表われており、この時期を教育上のもう1つの大事な時期として捉える必要がある。
 - 3年生は(a)進路に対する評価で、約6割の人が「間違ってたかった」と答えた昨年と比べて、マイナス面への変化はなく「身体・健康」「政治」への重視度が高くなっている。病院実習での目的達成の努力、最終学年生として自覚の一端がみえる。
 - 2N2年生は(a)進路選択に対する評価でもマイナス面が多くなり、(b)~(d)の各項目

の変化も3年課程の学生の2年生3年生との部分的な重なりはあるが、特徴はみえない。衛生看護科から続く5年間の看護教育期間の2年間を短大看護科の教育として明確にした教育内容、方法等の工夫が必要である。(3)目的意識が明確でないとした人達(B群)は、1N2、3年生全体に比べて各項目共変化は少ない。

おわりに

看護職への態度に関して、昨年に続いて同じ調査をした。課程別の特徴、1年間の意識の変化さらに目的意識が明確でないとした人達について、各学年全体との比較をした。

結果を現状の教育課程との関連でみると、各学年の学生の動きと特徴がみえ、教育内容方法等工夫の必要性が分かった。今後も継続して縦断的にみていきたい。

謝 辞

結果の統計的处理について、ご指導くださいました本学統計学、数学の歳森博教授、大森健三助教授に深く感謝いたします。

引用文献

- 1) 岡本英雄, 松本純平: 進路選択状況調査報告——看護学生の進路選択と進路設計, 日本看護協会調査研究誌, 報告 No. 4 (1976)

参考文献

- 1) 山本よしゑ, 他: 看護学生のアイデンティティ形成過程, 第16回日本看護学会集録誌, 140~142 (1985)
- 2) 松本光子, 他: 看護学生の進路決定過程について, 看護教育, Vo. 13, No. 1, 54~58医学書院(1972)
- 3) 松田とし子, 他: 本学院における入学者の実態と適応状況——共通一次試験受験者との比較, 第13回看護教育集録誌, 154~159 (1982)
- 4) 高森スミ: 看護学生の選職意識に関する実態調査, 東邦大学医療短期大学紀要, 1~17 (1984)
- 5) 松本純平, 岡本英雄: 進路選択状況調査報告——看護学校3年生の職業に関する意識および将来の計画, 日本看護協会調査研究誌, 報告 No. 16 (1981)
- 6) 松下由美子, 他: 看護学生における適性と適応に関する調査と考察, 東邦大学医療短期大学紀要, 19~25 (1984)

